

リサーチエビデンスを看護ケアに活かす ～今とこれから～

編集：角甲 純^{*1}，小林 成光^{*2}

^{*1}Jun KAKO：三重大学大学院医学系研究科看護学専攻/がん看護専門看護師

^{*2}Masamitsu KOBAYASHI：聖路加国際大学大学院看護学研究科/がん看護専門看護師

特集にあたって



がん患者は、がん治療やがんに伴うさまざまな症状を経験することで、最良の QOL (quality of life) の達成が妨げられることは少なくありません。患者を支える家族もまた、患者の意思決定を支えるなかで、心の揺らぎや精神的な負担を経験されているかもしれません。患者・家族のケアニーズをとらえ、必要とされているケアを届けることは、看護師にとって重要な役割の一つです。

2000 年頃からエビデンスに基づく実践 (evidence based practice：EBP) に関心が高まり、ケア提供の重要な要素と位置づけられるようになりました。EBP とは、利用可能な最良のリサーチエビデンス (研究結果) と、患者・家族の趣向、ケアを提供する環境やケア提供者の実践知を統合し、提供されるものだといわれています。私は、EBP の要素である「最良のリサーチエビデンス」のシーズ (種) は、皆さまが日々、臨床で提供されている一つずつのケアだと考えています。すでにリサーチエビデンスが集積されている分野や、これからリサーチエビデンスが集積される分野もあるかと思っています。しかし、臨床の看護師がその情報をキャッチし続けることは、なかなかたいへんなことです。

そこで、本特集では、臨床の最前線で患者・家族のケアを提供されている看護師の皆さまを対象に、看護ケアに焦点をあてた、がん治療期におけるリサーチエビデンスと、終末期がんにおけるリサーチエビデンスについて、症状別に解説していきます。

本特集の執筆陣は、個々のトピックを研究テーマにしている看護研究者にお集まりいただきました。紹介するリサーチエビデンスのなかには、すでに臨床で実践されているものもあるかと思いますが、その場合には、リサーチエビデンスの確認につながるよう、執筆をお願いしました。また、臨床で馴染みのないような最新のリサーチエビデンスを紹介する際には、今後、臨床で実践される可能性があるケアとして、その適応方法について解説をお願いしました。

本特集が、看護師の皆さまの看護ケア提供の引き出しが増えることや、自信をもって良質なケア提供することにつながり、ひいては患者・家族の最良に少しでも近づくことになりましたら幸いです。

編集者を代表して 角甲 純